

京の教員特別セミナー「小学校教員理科研修」レポート

アート・コミュニケーション研究センター 研究員

北野諒

「この研修の成功のカギは、どれだけ長くニコニコして過ごせるか！」

という大野照文 教授（京都大学教授、同総合博物館館長）の気さくなイントロダクションから京の教員特別セミナー「小学校教員理科研修」は始まった。本セミナーは京都大学と京都府教育委員会の連携事業であり、平成23年7/25～27の三日間、京都大学総合博物館や花山天文台を会場として開催され、16名の小学校教員が参加した。このレポートでは、京都造形芸術大学より水野哲雄（こども芸術学科教授）と福のり子（ASP学科教授）が講師として参加した第一日目の概要を紹介する。

「五感（感性）を磨く」

第一日目の午前、まず最初の講義として、水野教授のワークショップ「五感（感性）を磨く」が行われた。ワークショップは大きく前半と後半に分かれており、前半では、各テーブルに配られた紙と色鉛筆を用いて、「らくがき」をすることから始まった。そして、その体験は段階を踏んで、複雑に発展していく。

順を追って見てみよう。一枚目は両手に色鉛筆をもって、楽に、自然に動かせる身体の動きを探る。二枚目は自分の息継ぎに呼応させて線を引いてみる（また周りの人の線から楽譜のように息継ぎを読み取ってみる）。三枚目～五枚目は周りの人と紙を交換しながら、相手の描いた線と会話をするように線を重ねてみる（最初は二人で、次に四人で、次に八人で、と段々「会話」をする人数が増えてくる）。そして最後に、「会話」の結果できあがった絵を単語で表してみる（さらに出てきた単語同士を繋げて文にしてみる）。このような体験によって、参加者は自分ひとりでは想像もしなかったような絵や言葉と出会うことになる。

また、ワークショップの後半では、鏡を用いて「天井をみながら歩く」ことが行われた。参加者は目の直ぐ下に鏡を持ちながら、部屋や廊下を歩くのだが、当然視覚として入ってくるのは天井の映像である。急に天井の高さが変わるところや、ドアなどの境目にさしかかると、頭では分かっているけど身体が思うように動いてくれない。さらに続いて、紙の上に置いた鏡をみながら「鏡のなかで読めるように文字を書く」ことも行われた。こちらでも、単に左右や上下が逆転しているだけ、と理屈では分かるのだが、手は初めて文字を書いているかのようなぎこちない動きになってしまう。このような体験によって、参加者は今まで気づいていなかった視覚への依存を知ることになる。

このワークショップを通して、参加者は想像しなかった / 気づいていなかった自分自身の「身体」や「他者」に向き合うことになった。それはまさに水野教授が「理科と美術が分化する前の自然に対する態度」と語ったような、自己のコントロールを超えた何ものかと接する体験であり、またそれを何とか観察し、言語化し、コミュニケーションしようとする試みであった。

「みる かんがえる はなす きく」

昼休憩を挟み、続いて「みる かんがえる はなす きく」と題された福のレクチャーが行われた。理科と図画工作（美術）の学習指導要領から言葉を抜き出し、両教科を比較することから始まったレクチャーは、美術館における鑑賞教育の現状や、アートとアート作品の違い、意識をもって「みる」ことなど、様々な分野を貫くテーマに展開していく。

順を追って見てみよう。福は、美術と理科は一見、異なっているように思えるが、「みえたことから、なにかをみつけだすこと」において、実は両者には相通ずるものがあるとし、「みる」「発見」そして「コミュニケーション」の3つを共通する重要な要素として提示した。

レクチャーはそこから美術における「みる」こと、つまり鑑賞教育の現状に展開する。福は90年代から鑑賞教育のバイブルとされてきた「テイト・トレイル」（イギリスのテートギャラリー発行のワークシート集）を例にとりあげ、従来型の知識に偏った作品鑑賞の問題点を指摘した。「情報や知識は、鑑賞者にそれを受け入れる準備が出来たとき、また情報を得ることで、自分自身の問題に引きつけたりするなど、より踏み込んだ鑑賞が可能になるときに与えるべき」であり、鑑賞者の立場 / 状態を考慮した作品鑑賞が必要であるとした。

また、福は「アートはアーティストがつくるものではない。鑑賞者がつくるものだ」「アートとは、そこに存在しないなにかを、そこにみるという行為である」と語り、鑑賞という行為の創造性、重要性を指摘した。作家（の意図）という唯一の正解に偏らず、複数のみ方、解釈があるからこそ芸術が生き延びることが出来るのであり、そのような「妄想と誤解と訂正の道」はまた、あらゆるコミュニケーションにも共通する要素であるとした。

さらに続いて、京都造形芸術大学ASP学科で行われている対話型鑑賞プログラムACOPが紹介され、作品画像（ゴッホの「靴」、ムンクの「思春期」など）を幾つか提示しながら、鑑賞者の発言、解釈の例、ナビゲーターの応答の仕方など、鑑賞の実例が示された。福はACOPで行われるような「意識をもってみる」行為は、理科で求められる「目的意識をもった観察」、「科学的な見方や考え方を養う」、「問題解決の能力」と共通するものではないか、と指摘した。

これらのレクチャーを踏まえ、最後に福がナビゲーターとなり、実際に対話型鑑賞が行われた。参加者は、初めての体験に戸惑いながらも、根拠づけて絵をみることの重要性を体感し、また自分ひとりでは発見し得なかった多様な解釈に驚きを覚えていたようだ。

「地震のはなし」

福のレクチャーを終え、一日の締めくくりとして「地震のはなし」と題された加藤護 助教（京都大学 人間・環境学研究所）によるタイムリーな地震学の講義が行われ、第一日目は幕を閉じた。加藤先生は、普段講義を始める前に受講者の方から質問を集め、そこからレクチャーを組み立てるといふ。今回は時間の問題で、そのような構成は出来なかったが、他者の疑問から始めるという姿勢は「受け手が主体である」という意味において、水野教授のワークショップで行われた他者との応答によるドローイングや、グループによる鑑賞で多様な解釈を導くACOPの方法と共通する部分があるのではないだろうか。

こうして一日の流れを追ってみると、特に水野 / 福のワークショップ、レクチャーは互いに深く共鳴していたように思える。「みる」ということをただ当たり前の行為としてではなく、様々な解釈、想像、誤解、妄想の入り混じった能動的な行為として捉え直すこと。また他者とのコミュニケーションにより、自分だけでは到達し得なかった発見、体験を導きだすこと。それらはまた両者が度々指摘していたように理科における観察や思考とも通底するものであった。

とはいえ、普通に考えれば「理科」の研修としては突拍子もない試みであったとも言える。少々面食らいながらも、ワークショップとレクチャーを興味深げに体験していた参加者の方々はどのように感じられただろうか。短い時間ではあったが、「美術」から差し出された問いが、思いもよらないところでモノのみ方や考え方を揺り動かすことが出来れば幸いである。